

観能の夕べ

(石川県立能楽堂)

平成二十九年八月五日(土曜日)午後六時三十分開演

演目解説 (石川工業高等専門学校准教授 佐々木 香織)

狂言 狐塚(きつねづか)

狐塚と呼ばれる田へ鳥追いにやらされた太郎冠者は鳴子を使い、昼間は鳥追いに興じますが、暗くなるにつれて心細くなり、狐に化かされはせぬかとおびえるところへ、闇の向こうから声がして次郎冠者を名乗ります。狐の仕業と決めつけた太郎は次郎を鳴子で縛り上げ、同じく慰勞に來た主人にもそうして、二人を青松葉でいぶします。太郎が鎌を借りに行く間に縄を解いた二人が太郎を倒し、それをなおも狐の仕業と思う太郎が追い込みます。

能 卷絹(まきぎぬ)

今の天皇の靈夢により千疋せんびきの卷絹を三熊野の神前に奉納することになりました。臣下(ワキ)は国々から卷絹を集めますが、都からの分の到着が遅れています。それを運ぶ人夫(ツレ)は旅路を急ぎながら、本宮手前の音無天神おとなしに立ち寄り、冬梅を見て一首の和歌を手向けた分、遅参しました。それを咎めて臣下が人夫を縛めいまし、罪の報いを思い知らせます。その時、どこからともなく巫女(シテ)が現れ、音無天神を名乗って、和歌を手向けた者ゆえにすぐに縄を解くよう求めます。神慮に偽りのない証拠に、巫女は人夫に上の句を詠ませ、自分はその下の句を付けて、臣下の疑いを解くと共に人夫の縄も解いてやります。和歌は本朝の陀羅尼だらに、仏神も親しむその徳を称えて舞う巫女は、臣下の求めにより幣へいを取り持ち祝詞のりとを上げて、さらに神楽を舞ううちに物に狂って神語りします。仏法守護の熊野全山、諸神が巫女に取り憑いて身の毛もよだつ狂乱の果てに、神はあがり巫女も本性に戻ります。

装束附 シテ(巫女)

(金沢大学人間社会研究域教授 西村 聡)
鬘をつけ、鬘帯をしめ、翁烏帽子をかぶり、女増髪又は泣増の面をかける。

終了予定 午後八時十五分頃